

Title	判断意識について
Sub Title	
Author	山本, 万二郎(Yamamoto, Manjiro)
Publisher	三田哲學會
Publication year	1936
Jtitle	哲學 No.16 (1936. 7) ,p.1- 66
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00150430-00000016-0001

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

判断意識について

山本万二郎

はしがき

判断意識について論ずるには、先づ意識の構造を明らかにしなければならぬ。意識とは何ものかが或るものと意識することであるから、意識の構造を明らかにするには主觀、客觀及びその關係の三側面から考察しなければならぬ。それ故本論文では初めに、その三方面から意識の構造を論じ、而して後、判断意識の特質について検討しようと思ふのである。

それには先づ、リッケルトの形而前的 (prophysisch) の思想を出發點とし、尋で、フッセルの純粹意識の概念に論及し、更に、その兩者を關聯せしめることによつて、意識の構造を明らかにし、最後に、それを土臺として判断意識のいかなるものかについて

て考究しようと思ふのである。尙ウイルムゼンといふ人の著書の中にリッケルト及びフッセルに關する點があるので、最後に少しくそれに觸れて、判斷意識の概念を一層明確ならしめる爲の一助にしたいと思ふ。

尙リッケルトの形而前的思想を出發點としたのには二つの理由がある。その一つは、彼の形而前的思想が、フッセルの純粹意識の概念と密接な關係にあると思はれるからである。而して他の一つは、兩者の思想を關聯せしめることによつて、リッケルトの先驗的哲學とフッセルの先驗的現象學とを關聯づけてみようと思ふからである。

(リッケルトの思想については「哲學第十三輯拙論「リッケルト哲學思想の發展」に於て詳述してあるので、本論文では用語の説明、出所頁等を大部分省略した。従つてリッケルトの思想については前記論文を参照して戴きたい。)

一 リッケルトの形而前的領域

リッケルトの形而前的思想は一九二一年「哲學體系」以來のものであるが、彼は

それを以て、或時は主觀と解し、或時は内容と解してゐる。而も彼が内容と呼ぶものは、單に感性的のもののみではなく、非感性的乃至可想的のものでも含むのであるが、更に後者は意義と意味とを含むである。又主觀といつても、或時は作用として、或時は形式として解してゐる。かくて彼が形而前的として解するものは區々であつて、一定しないのであるが、最近リッケルトはこれらの諸要素の何れをも形而前的のものとして解する爲に、一九三四年「哲學の根本問題」に於て、形而前的領域とは、對象化される前(vorgerenständlich)の領域乃至對象の前提(Voraussetzung)となる領域であつて、それには一方、客觀化乃至對象化されることの出來ないもの即ち主觀と、他方、客觀化されることとは出来るが、まだ客觀化されないもの即ち内容とが屬するものである、としてゐる。これによつて形而前的なるものの問題は一應解決した様に見えるのであるが、仔細に考察して見ると、そこに種々なる問題が残されてゐると思ふのである。即ち先づ、客觀化されることの出來ないものとしての主觀とは、いかなる主觀であるか。次に、感性的内容と非感性的内容とを同列に論ずることは妥當であらうか。最後に、形而前的領域に於ける主觀と内容とは、いかな

る關係にあるか。今これらの問題を順次見て行かう。

(一) 主觀 リッケルトの從來の思想によれば、作用としての主觀は經驗的心理的主觀である。従つてそれは客觀化され得るものである。反之、形式としての主觀即ち意識一般は決して客觀化され得ぬものである。客觀化され得るものは一切、意識一般に對して内容となるものである。従つて作用としての主觀も、形式としての主觀にとつては、内容となり得るものである。それ故、先に形而前的主觀として、客觀化され得ぬものと規定された主觀は、作用としてではなくして、形式としての主觀でなければならぬことになる。然るにリッケルトが「哲學の根本問題」に於て考へた形而前的主觀とは單なる形式ではなくして作用としての主觀である。然し彼の説く所によれば、かかる作用は机や苦痛感の様な現實在ではないが、非實在的 (irreal) なものに對して一種の現實的存有(eine Art des Wirklichseins)を有し、而も客觀化し得ぬものである、といふのである。是を以て見れば、それはたとへ作用であつても、心理的なものではあり得ないのであつて、それは同時に意識一般としての性質をも有するものである、といはねばならぬ。即ちそれは形式であると同時

に作用である所の主觀である。然しかる主觀概念は妥當なものであらうか。元來主觀とは必ず客觀に對して働くものであつて、いかなる意味に於ても客觀に對して働くことをしないものは主觀とはいへないのである。而してかかる客觀に對して働くといふことが即ち作用である。従つて主觀概念から作用概念を取去ることは出來ないものである。と同時に、哲學上主觀といはるべきものは、決して心理的、經驗的なものではなくして、經驗から純粹なるものでなければならぬ。

その意味で形式としての性質をも有すべきものである。かくて、形式であると同時に作用である所の主觀は、寧ろ哲學に於ては必然的に求めらるべきものといはねばならぬ。然しかる主觀はリッケルトのいふ如く現實的ではあり得ない。何故ならば、彼によれば現實的とは實在的といふことを意味すべきであるから、現實的作用とは心理的作用に外ならぬからである。従つてそれは非實在的なものでなければならぬ。又若し彼がその際現實的といふことを以て存在一般を意味するものとすれば、非實在的なものをも現實的といつて一向差支ない筈である。

かくてリッケルトの形而前的主觀は、一方、彼の主張する如く作用ではあるが、他方、

彼の見解と異なつて非實在的であると解さねばならぬ。作用とは必ずしも心理的又は現實的なものとは限らないのであつて、作用を以て飽くまで實在的であるといふならば、それは先驗的立場と經驗的立場との混同である。先驗的立場に於ては作用も亦非實在的でなければならぬ。然しかる非實在的作用の概念はリッケルトの立場を越えるものであつて、それはフッセルの現象學に於ける作用の概念を暗示するものである。

(二) 内容 (イ) リッケルトは先驗的觀念論從つて同時に經驗的實在論の立場をとるものである。故にその立場から見れば實在的のものは經驗的立場に於て初めて認められるものであつて、本來は觀念的のものである。換言すれば本來觀念的のものが、經驗的立場から見る時、それが實在として考へられるのである。

故に經驗的立場に立つか、若しくは兩者の立場を混同しない限り、その領域に實在的なものが直ちに入つてくることはあり得ない筈である。從つて純粹に先驗的觀念論の立場に立つ限り、實在的のものは全く排除されねばならぬ。少くとも觀念的のものと同列におくことは出來ない筈である。(ロ) 尤もリッケルトは感性

的内容を以て直ちに實在的對象と解してはならぬものであると考へ、前者は後者となり得るものではあるが、いまださうならぬものであるとしてゐる。然し先驗的な立場に立つ限り總てが觀念的でなければならぬ。従つてその中には感性的——リッケルトによれば既に、實在的のものとなるべきものと解されてゐる——と非感性的との區別はあり得ない筈である。若しその區別を前以て許すとすれば、それは不當假定の誤を犯すものといはねばならぬ。(ハ) 尚、彼の説に従つて解釋するならば、たゞ感性的乃至實在的のものがあるにせよ、それは形而前的領域に入つて來ないものといはねばならぬ。何故ならば、彼によれば感性的に直觀されるものは流動的であるが、それは決してそのまゝ内容となるものではない。元來内容とは、對象が主觀に *gegenstehen* するのに反し、主觀に *zustehen* するものである。即ち主觀にとつて *zuständig* となつたものである。従つてそれは決して純粹に直接的なものではなくして、既に固定されたものである。即ち同一性の形式を有するものである。然るに實在的のものは決して同一ではない。従つて同一的のものは感性的のものではなくして、非感性的のものでなければならぬからである。

かくて感性的内容と非感性的内容とを同列に論ずるのは立場の混同によるものであつて、先驗的觀念論の立場に立つ限り實在的のものは全く排除され、従つて形而前的内容とは非實在的のもののみと解されねばならぬ。

(三) 主觀と内容との關係——能作 (Leistung) リッケルトによれば能作とは、他者に對する主觀の態度決定をいふのである。而してその際、主觀とは經驗的主觀であり、他者とは價値乃至超越的意味のことである。然し主觀については既に(一)に於て述べた如く解すべきであるとすれば、それに對する他者とは如何なるものと解すべきであらうか。

彼は超越的意味と内在的意味とを區別してゐるが、内在的意味は更に二通りに解されてゐる。即ちその一つは今述べた能作としての意味であつて、それは價値から作用を見た限りに於てのみ作用に屬するものである(一九一二年「判斷と判斷作用」『認識の對象』第四、五版及び一九二一年「哲學體系」)。然るに他の一つは直接所與としての意義及び意味であつて、それは前者と異なつて作用に對應する一つの領域であるが、又超越的意味とも異なつて作用に内在するものである(『限界』第五版及

び一九三四年「知と認識」)。然らば後の意味での内在的意味と超越的意味とは如何なる關係にあるか。彼によれば、内在的意味は経験的主觀により、超越的意味とは先驗的主觀即ち意識一般により構成されるものである。然るに前述の如く、主觀側に於て作用としての主觀と形式としての主觀とは、先驗的立場に立つ限り、一に歸すべきものである。従つて意味側に於ても純化された立場に於て見れば、後の意味での内在的意味と超越的意味とは一に歸すべきものといはねばならぬ。かくて作用に對する他者は、超越的意味のことではなくして、非實在的意味一般といふことにならう。然るに意味一般とは内容としての意義及び意味と構成されたものとしての意味とを含むものであるが、リッケルトによれば形而前的領域は直接的なるものであつて、いまだ構成されぬ領域であるから、構成されたものとしての意味は、その領域から排除されねばならぬ。かくて形而前的領域に關する限り、作用に對する他者は(二)に於て述べた、内容としての意義及び意味である、といはねばならぬ。

それ故意味は超越的と内在的に區別されるのではなくして、他者としての意

味と能作としての意味とに區別されるであらうが、右の如く解してくると、能作とは經驗的主觀が超越的意味に對する關係ではなくして、非實在的作用が非實在的內容に對する關係として解されねばならぬ。

然らば、その關係とは如何なる關係であるか。それにはリッケルトの「直接的なもの」の概念を検討しなければならぬ。彼によれば直接的なものとは、一般に直接所與即ち客觀側のみと考へられてゐるが、それは誤である。何故ならば所與といふ以上は、與へられるものと同時に、それに對して與へられる所のもの即ち主觀が必ず考へられねばならぬからである。故に直接的なものとは、必ず主觀、客觀の兩者を含む二重性の統體である、といふのである（一九二三年「哲學の方法と直接的なもの」）。而して彼は、かかる直接的なものに於ける直接所與とは形而前的内容であり、それに對する主觀とは形式としての意識一般である、としてゐるのであるが、それら兩者は何れも前述の様な意味での形而前的な主觀及び形而前的内容として解されねばならぬ。かくて形而前的な領域に於ける作用と内容とは、直接的なものとの二側面であつて、その關係は決して中介としての第三者を要しない

ものである。従つて能作とは第三者として作用と内容とを中介するものではなくして、作用と内容との相即關係そのものをいふのである。即ち統體としての領域を分析する場合に、その兩端が各、作用と内容であり、その關係が能作であるといふに外ならぬものと解すべきである。形而前的領域とは、かかる意味に於て、非實在的作用と非實在的內容との、能作による直接統一體である。(尙ここには主觀と作用とを同一義に解して來たが、これについては後に詳論する。)

かくて形而前的領域の構造は、一應明らかにされた様に見える。然し尙疑問の點が殘されてゐる。即ちリッケルトによれば、能作とは他者への態度決定であるが、態度決定とは判断についていへることであり、従つて構成を意味する。然らば上述の如く、作用の、直接所與としての内容への關係を、それが單に他者への關係であるとの理由によつて、直ちに能作といふことが出来るであらうか。又作用にとつては、内容のみならず構成されたものとしての意味も亦、他者として考へられはしないであらうか。更に、彼によれば構成されたものとしての意味は判断によるものであり、従つて間接的なものであるから、形而前的領域から排除されるのであ

る。然らば形而前的領域と判断とは如何なる關係にあるか。ここに判断の問題が擡頭するのである。然し今直ちにそれらの問題に立入る前に、フッセルの純粹意識について考察しなければならぬ。何故ならば、リッケルトの形而前的領域及びその構造は、フッセルの純粹意識のそれを暗示するものであつて、それを検討することによつて問題の解決に進むことが出来ると思ふからである。

二 フッセルの純粹意識

フッセルは意識の概念を廣狹二義に解してゐる。即ち狹義に於ては作用と同意義であるが、廣義に於ては作用と内容との統一より成る全體を意味する。而してその際、作用側を *poesis*、内容側を *noema* といふ。又作用とは内容を志向するものであるから、作用の内容に對する關係を志向性 (Intentionalität) といふ。それ故意識——廣義に解された場合——の構造はノエシス、ノエマ及び志向性の三方面より考察しなければならぬ。(ここでは、意識といふ概念は、廣義に解された場合の方を意味するものとして用ひ、狹義に解された場合の方には作用の概念を用ひて兩

者を區別する。)

(I) ノエシス フッセルによれば作用は作用性質と作用質料とから成るものであつて、兩者が備つて初めて具體的作用體驗といはれる。然るに後者は狹義と廣義とに解される。狹義の場合には把握質料 (Auffassungsmaterie) 又は把握意味 (Auffassungssinn) と呼ばれる。廣義の場合には表示體 (Repräsentation) と呼ばれ、それは三つの契機より成る。即ちそれは把握された内容 (der aufgefasste Inhalt) と把握質料と兩者の統一形式としての把握形式 (Auffassungsform) 乃至表示體の形式 (Form der Repräsentation) とある。⁽¹¹⁾ 把握質料とは種々なる作用に對して同一的なるものであり得るものであり、對象に對する關係を示し、對象がいかに把握されるかを示すものである。従つてそれは元來意味であつて、ノエマ側に屬すべきものである。彼も「理念」に於てそのことを明瞭に認めてゐる。⁽¹²⁾ 故にノエシス側に於て、質料として問題となるのは、かかる把握質料ではなくして、把握された内容としての質料である。後者は前者の如く意味としての同一契機ではなく、常に變るものであつて、感覺又は感覺複合であり、又は感覺された内容である。これは「理念」に於ても翁ノ

ニシス側に屬するものとされてゐる。それにも拘らず、彼によればそれは作用といはれ得ないものと解されてゐる。何故ならば本來作用といひ得るのは志向性を有するものでなければならぬ。然るにかかる内容には志向性がないからである^(四)。又「理念」に於てもこれと同様のことがいはれてゐる。即ち具體的志向體驗は感性的素材(sensuelle *W*er)と志向的形式(intentionale *M*orphi)とを有するが、前者は志向性を有しない感性的なものであり、後者はそれを生がし(beseelen)それに意味を與へる(sinngeben)ものである。而して兩者は各形式なき素材、素材なき形式として、はつきり區別されてゐる^(五)。それにも拘らず、兩者とも體驗に於ける志向的相關者即ちノエマに對する志向的體驗の本來の要素として、又は reell なるものに對する reell な要素として、ノエシス側に屬するものとされてゐる^(六)。然るにかかる内容乃至素材は感覺又は感覺與件であるが、それは志向性又は意味賦與といふ性質を有しないものである。それ故作用とはいはれ得ない、といふのである^(八)。かくて質料としての感覺は(a)志向性を有しない(b)意味賦與作用でない、といふ二つの理由によつて作用ではないと解されてゐるのであるが、次にこの點を吟味しなければ

ならぬ。(尙内容の概念は一方素材乃至質料として、他方ノエマ乃至意味として解されるが、ここでは用語上單に内容といふ場合には後者の意味に用ひることにする。)

(a) 感覺と志向性 作用は必ず内容を志向するものであるのに、その作用の中に志向性を有しないものがあるといふことは、作用でない内容を作のの中に入れ得るのである。即ちノエシス側に屬するものである以上は、いかに基底的のものであつても、やはり一種の作用といはねばならぬ。それ故フッセルもかかる質料を以て、一方作用でないといひ乍ら、他方それは表象といふ特殊の作用によつて與へられるものである、といつてゐる^(九)。即ちこれは、質料といふ様なものの場合でも、作用と内容との對應即ち志向性の存すべき事を示すのである。従つて丁度、知覺に知覺作用と知覺されたものとの區別があるべきであつて、感覺内容乃至感覺與件とは感覺作用に對するノエマ側のものを意味するものと解すべきである。

(b) 感覺と意味賦與作用 感覺が右の如くして、たとへ作用として認められた

にせよ、感覺が意味賦與作用と區別されるのに四つの理由が考へられるであらう。今それを順次吟味して行かう。(イ) 先づ、感覺は純粹受容性乃至所與性であるのに對し、意味賦與作用には主觀の自發性が加味されてゐるといふ事である。然るにフッセルによれば意味賦與作用と解される知覺を以て原本的能與作用と稱し、それによつて指定されるものは原本的所與性を有するものであるとしてゐる。^(一〇)

而も尙そこに作用と内容との區別を認めてゐるのである。蓋したとへ受容性であつても受容性と受容されるものとは區別されねばならぬからである。確に感覺は單純であり、知覺は複雜である。然し單純か複雜かを問はず、受容性としての知覺に尙作用としての性質を認める以上は、純粹受容性としての感覺にも作用としての性質を認めねばならぬであらう。又純粹受容性を自發性から區別したが、受容性といつても、フッセルが知覺を以て一方原本的能與作用と稱した如く、全く主觀の自發性なしには成立しないものである。かくて自發性と受容性とによる區別は原本的のものとはいへぬ。フッセル自身も、ノエマの構成には能動的と所動的とあつて、前者は理性により、後者は聯想によるものであるが、後者も亦志向性。

を有するといふことを認めてゐるのである。^(一一) これは能動も所動も作用の本質には何の變もないといふことを示してゐるものといはねばならぬ。(ロ) 次に、意味賦與作用は、ノエマとして意味を志向するが、ノエマは ideell なものである。然るに感覺に於ては感覺内容も亦 reell であるから、それは本來ノエマとはいひ得ないといふ事である。然し感覺内容を reell と考へるのは一方、感覺作用と感覺内容とを區別せずして、感覺を以てノエシスの質料と解するのに基くのであつて、その誤であることは前述の通りである。而して感覺作用と感覺内容とが區別される以上は、後者は作用の要素ではないのであるから當然 ideell でなければならぬ。又他方に於て、感覺に於ける作用と内容とを區別し乍らも尙、感覺内容を以て reell であると考へるならば、それは自然的立場と現象學的立場との混同である。何故ならば、現象學的領域とは嚴密なる現象學的還元を経て到達したものであつて、凡ゆる經驗的事實は勿論超越的本質をも排除せる、純粹内在的本質の領域である。それ故かかる立場に於ては感覺といつても決して感性的なものではなくして非感性的なものと解されねばならぬ。従つてそれに對應するものも、他の作用に對應す

るものと同様に非實在的のものでなければならぬ。それ故かかる立場に於ても尙感覺のみが何等か實在的なるものに關する如く考へるのは、少くとも心理學的現象學と先驗的現象學との混同に基くものといはねばならぬ。^(一) (ハ) 更に、感覺は直接所與であるのに對し、意味賦與作用は構成的陳述的であるといふ事である。

この點についての區別は確に成立するものである。何故なれば、感覺是最基底的であり、意味賦與作用は高次的であるといふことが出来るからである。^(二) 最後に、感覺は直觀的であるが、意味賦與作用は意味指示的(signitiv)であるといふことである。この區別も成立するものといへる。何故ならば意識の流に於てそれ自らが充實作用であるか、又は時間の経過の後に充實作用が行はれるか、といふ區別が成立するからである。(この點は判斷に關係があるので後に詳論する。)

かくて感覺と意味賦與作用とは前の二つの理由によつては區別されないが、後の二つの理由によつて區別されるのである。然しこれを以て直ちに、感覺は作用でない、といふことが出来るであらうか。

感覺に於て作用と内容との區別が認められ、而もその作用が ideell なノエマに

向ふものとすれば、その作用、内容の關係は當然志向性といはるべきものでなければならぬ。而して元來作用であるか否かの決定は志向性の有無によるものであるから、感覺にも志向性が認められる以上、當然本來の意味で作用と稱すべきである。従つて感覺がたとへ基底的、直觀的であるとして、構成的、意味指示的なものとしての意味賦與作用から區別されるとしても、それを以て感覺から作用としての性質を奪ふ理由とはならぬ。又嚴密にいへば志向性といふことが一般に意味賦與作用であることを示すものである。何故なれば志向性とはノエマを志向することに外ならないのであるが、ノエマとは意味であるから、志向作用とは意味を志向するものであるからである。故に高次の、意味指示的作用としての意味賦與作用とは志向性の一つの様相に外ならぬ。即ちそれは狹義の意味賦與作用であつて、廣義の意味賦與作用とは一般に志向作用と一致する。故に感覺も亦志向性を有する限り、作用であり而も廣義に於ける意味賦與作用である。

かく見てくると、ノエシスの構造は、作用ならざる質料に意味賦與作用が加はる、といふものではなくして、最低次作用を基底として、その上に高次の作用が加はる

ものと解さねばならぬ。ノエシス側は飽くまで純粹に作用のみから成るものといはねばならぬ。それ故かかる作用の層の構造全部がノエシスであると共に、その各層が各ノエシスである。従つて質料としての感覺も、それだけでノエシス、ノエマの兩側面を有するものであつて、そのノエシス面のみがノエシス側に、そのノエマ面はノエマ側に屬すべきものである。而して質料といふ名稱は單に上層の作用に對する基底といふ意味であるに過ぎぬ。一般に低次作用は高次作用に對して各々相對的に質料となるといふことが出来る。然しその際、質料といはれるからといつて、それが作用としての性質を失ふものではないことは當然である。最低次作用はノエシス側に於ける最基底である如く、そのノエマはノエマ側に於ける最基底である。元來、質料といふ概念は後者を示すに適當な概念である。従つてフッセルが質料を作用側に於ける素材としての基底と考へたのは、作用側に於ける最基底といふ意味と、内容側に於ける最基底といふ意味とを混同したものである、といはねばならぬ。

(二) ノエマ 現象學的還元を經たる純粹意識に於ては一切の實在的、感性的な

るもの及び超越的なものは排除され、残るものは唯、純粹内在的本質のみの世界である。かかる領域内に於て、ノエシスの志向的内容となるものがノエマである。それ故ノエマは、一方に於て決して實在的、感性的なものではあり得ない、と共に他方に於て、それは決して意識の外にあるのでもなければ又外から來たものでもなくして、結局作用によつて構成され創造されるものに外ならぬ。従つて所與とは本來の意味ではいひ得ぬものであつて、作用は元來能與作用でなければならぬ。

それ故獨立領域と考へられる本質の世界も亦作用の創造によるものである。^(一三)かくてノエマは決して意識を超越するものではない。超越的とは本來、超越的として指定されたるもののことに外ならぬ。かくて一切は作用の創造によるものであるから、ノエマは全くノエシスに並行するものである。

然らばかかる領域に於て感覺内容とはいかに解すべきであるか。フッセルによれば多様の感覺の綜合せる所に知覺が成立するのであるから、感覺内容の問題を解決するには先づ知覺の構造を考察しなければならぬ。彼によれば知覺とは原本的能與作用であるが、それには感性的と非感性的即ち範疇的とある。^(一四)前者は

實在的なるものに向ひ、後者は非實在的なるもの即ち本質乃至意味に向ふものである。然るに純粹意識に於ては實在的、感性的のものは排除されるのであるから、ここで問題となるのは後者である。さてかかる非感性的知覺作用のノエマは意味一般であるが、意味には名辭的のものと、命題的のものとあり、更に各、單純なものと複雜なものとある。命題的のものは名辭的のものより、複雜なものは單純なものより成る。それ故名辭的なるものの單純なるものが基底であつて、その他のものは總てかかる基底を要素とせる複合體である。而して彼はその何れの形態を問はず、それらの原本的能與作用を非感性的知覺と名づけてゐる。然し前述の如く、知覺は感覺の複合より成るものである。故に本來、非感性的知覺とは複合體としての意味の能與作用であり、基底としての意味の能與作用が感覺、但し非感性的感覺作用といふべきであると思ふ。従つて前者のノエマは複合的意味であり、後者のノエマ即ち感覺内容、嚴密にいへば非感性的感覺内容は基底的意味である、といはねばならぬ。これによつてノエシス、ノエマの並行論が完成するのである。

然し感覺を以て右の如く解するには議論があるであらう。確にフッセルも非

感性的感覺なるものは明瞭には説かなかつた。然し「理念」に於て、感性的素材とは實在的なるものの陰影(Abschattung)であるが、現象學的還元を経たる以上、それは本質としての、意識内に於ける現象學的殘滓(das phänomenologische Residuum)と解すべきである、といつてゐる。^(一五) 卽ち感性的感覺に相應すべき本質を認めてゐるのである。感性的感覺の本質はとりも直さず非感性的感覺に外ならぬ。而して前述の如く、感覺に於ても亦、ノエシス、ノエマの對應が存すべきである故に、非感性的感覺作用に對して非感性的感覺内容が認められるのは當然のことといはねばならぬ。

(三) 志向性 作用は必ず何ものかに向ふ、と同時に内容は必ず作用に對する内容である。ノエマはノエシスによつて創造され構成されるものであるが、それにも拘らず、必ずノエマはノエシスに對してその對應者として存しなければならぬ。かかる性質を作用の志向性といふのである。志向的作用とその内容とより成る意識は流である。故にノエシスもノエマも轉移する。然し轉移とは皆無に歸することではない。或作用は以前の作用を土臺として成立し、次には他の作用の土臺となる。これはノエマ側に於ても同様である。土臺となれるものは新しいも

のの背景となる。然しその背景の中から再び明らかに浮び出ることもある。背景を擔つて進むものが意識の流である。而して常にその尖端にあるものが顯現的(aktuell)な作用又は内容であり、背景の中にあるものは潜在的(potentiell)である。而してかかる背景の全體を Horizont といふ。

右の如くノエシス、ノエマは相關聯して統體となつて具體的意識を構成するのであるが、既に述べた如く、ノエシス、ノエマが別々にあつて、それを志向性が統一するのではなくして、具體的意識を分析して、作用側から見てノエシス、内容側から見てノエマが、各、その兩極として考へられ、而してその際、兩者の關係をノエシスから見た時に、それが志向性と名づけられるものである、といふに外ならぬものである。

三 リッケルトの形而前的領域と フツセルの純粹意識との關係

以上に於て、リッケルトの形而前的領域とフツセルの純粹意識を考察したのであるが、その構造に於て兩者が全く相等しい事を認めるのである。然しこれを以

て直ちに兩者を同一視することは出來ぬ。故に兩者を關聯せしめる前に、その事の可能性について考慮しなければならぬ。換言せば、兩者の立場が同じ水準に達してゐるか否かを検討せねばならぬ。

リッケルトは認識論上先驗的觀念論をとるものであるが、それは一方形而上學的實在論に反對し、他方心理主義的乃至經驗的哲學に墮することを避けようとするものである。かくて認識主觀として求められたのが、形式としての意識一般であり、認識の對象として求められたのが價值である。前者は實在的對象の一切の構成形式を總括し、後者は非實在的對象即ち超越的意味の形式である。それ故リッケルトにとつて、哲學は形式の學であつた。然るに存在論的傾向に影響され、從來の認識形式の概念は存在形式の概念に置換られ、存在するものの形式の學としての存在論が哲學であると定義されるに到つた。然るに存在するものは形式と内容との構成であり、存在形式の多様は内容の多様に基づく、といふ見解の下に内容が重要視されるに到つた。然るに内容は直接的、直觀的であるが、直接的所與は同時にそれに對する主觀を豫想する。かくて直接的領域として形而前的領域が求

められたのである。

一方、フッセルの現象學も、一面、形而上學に反對し他面、經驗的見方特に心理主義的見解に反對して起つたものである。即ち現象學的還元によつて到達せる本質としての純粹意識とは、内在的本質である故に形而上學的超越的實在ではなく、又純粹なる先驗的意識である故に經驗的立場を越えるものである。而して最近特に強調する理性の現象學に於ては實在的なるものをも純粹意識に於ける構成として見ようとしてゐる。

かくて到達せる所を見るに、先づ、その立場は兩者とも全く實在性、超越性、經驗性を克服してゐるばかりでなく、却つてそれらに基礎を與へるものである。即ち何れも内在論的乃至觀念論的であると共に、經驗から純粹であるから、兩者とも自らの立場を先驗的觀念論といつてゐる。^{（一）} 次に、一方リッケルトは初め構成的立場を強調し、直觀主義を排斥したにも拘らず、最近内容の概観を重要視すると共に、直觀の重大性を認める様になつた。これはフッセルの本質直觀の思想の影響である。然るに他方、フッセルは直觀を重視するに拘らず、最近特に構成の概観を重んじ、そ

れを通じて彼自身の現象學を先驗的現象學といつてゐる程である。^(一七)特に彼が「凡
ゆる客觀は一般に——全内在的客觀も亦さうであるが——先驗的自我の構成の
規則(規則構成)に一致する」^(一八)と、いつてゐるのを見ると、カントの最高原則を思はし
めるものがある。かかる見解はリッケルト等の影響であるといはねば
ならぬ。更に、リッケルトの意義及び意味の概念特に直觀的に與へられる非感性
的內容としての意義の概念は、フッセルの本質の概念に接近するものである。(「哲
學」第十一輯拙論「蓋然判斷について」参照)。更に、方法に關しても、リッケルトは先驗
的主觀の概念に達する方法として孤立化的抽象(die isolierende Abstraktion)なるもの
を説いてゐるが、これはフッセルの現象學的還元又は諦觀の思想の影響によるも
のと解さねばならぬ。更に、フッセルの先驗的といふ用語には、(一)経験から純粹、
(二)経験の基礎となる、(三)超越的なるもの排除する、(四)構成的、といふ意味が
含まれてゐると思ふのであるが、それらは何れもリッケルトの先驗的立場を思は
しめる特徴であると思ふ。勿論それらが、リッケルトのそれと全く同一であると
はいへぬ。特に(四)は問題とならう。然しそれにも拘らずそのことは、兩者の見解

が根本に於ていかに密接な關係を有してゐるかといふことを示すものである、といへると思ふ。かく解して來ると、リッケルトの形而前的領域と、フッセルの純粹意識とを關聯せしめて論することは、決して不當ではないと思ふのである。

さてリッケルトの形而前的領域はフッセルの純粹意識に相應し、前者に於ける主觀は後者に於けるノエシスに、前者に於ける内容は後者に於けるノエマに夫々相應する。而してリッケルトに於ける直接所與内容としての意義と意味とは、フッセルに於ける意味の名辭的なるものと命題的なるものとに夫々相應する。最後に、リッケルトに於ては作用と内容との關係は能作である。能作とは態度決定として解されたが、作用、内容の關係に於ては態度決定といふことは根本的ではなくして、作用とは或ものに向ふ、或ものに關聯する、といふことが基本的であつて、態度決定といふことは、或ものへの關係の仕方の一つの様相である。それ故フッセル自身も Leistung の概念を廣狹二義に解し、一方措定作用と解し、他方志向性一般と解してゐる。⁽¹¹⁰⁾ かくて能作とは、作用と内容との關係一般の意味に解されるとすれば、廣義に解して、志向性と同義に解さなければならぬものである。かくしてリ

ツケルトの形而前的領域に於ける主觀と內容との關係及びフッセルの純粹意識のノエシス、ノエマの關係は志向性である、と確定することが出来る。

右の様に兩者を關係せしめることによつて、一應意識の構造を明らかにすることが出來たのであるが、まだ不明の點が殘つてゐるのである。即ち今まで主觀と作用とを同義に解して來たが、兩者はいかなる關係にあるか、又作用に對するものを内容といつて來たが、内容と對象とはいかなる關係にあるか、といふことである。

(一) 作用と主觀 リッケルトが哲學は形式の學であるといつた時、形式とは、形式としての意識一般及びそれに總括される實在の構成形式と超越的意味の構成形式としての價値形式とを總稱するのであるが、實在の構成形式と價値形式とは元來一致すべきものである。何故ならば主觀が實在を構成する時の對象即ち規準が超越的意味であるから、超越的意味が構成されてゐる如く實在を構成すべきであるからである。即ちかかる見解はカントの最高原則に基くものである。而して元來、意識一般は超越的意味の構成者であるから、形式とは畢竟、意識一般と意味の構成形式といふことになるのである。故に形式としての主觀とは廣く解す

ればそれらを總括せる全體と解され、狭く解すれば構成形式の最高形式として、凡ゆる構成形式が必ず豫想するものとしての意識一般と解される。

右は主觀を形式として見た時であるが、主觀は形式であると同時に作用であるといふのであるから、今述べた形式としての主觀に作用の意味をこめて説いて見よう。形式が内容を構成するといふことは、或作用を土臺として更に高次の作用が構成されるといふことである。而して主觀は各作用に必ず伴ふ同一契機である。かく解してくると内容の概念が今までと異なつたもう一つの意味を有することになる。即ち形式に對する内容といふ意味の外に、作用に對する内容といふものが考へられるからである。兩者は決して同一でない。形式と内容とは包摶關係をなすが、作用と内容とは志向關係であり、對應關係であり、從つて同位的並行的關係である。後者は作用と作用ならざるものとの關係であるが、前者はここでは作用と作用との間の關係である。リッケルトはこの二つの内容を混同した故に、正しい意味での作用としての主觀に思ひ至らなかつたのである。さて上述より見て、主觀とは嚴密にいへば作用側に於ける各作用に伴ふ同一契機であり、廣義

に解すれば、作用側全體を總稱するものであり、更に廣義に解すれば、作用側、内容側をも含む全體としての領域と解すことが出來よう。然し最後のものは意識領域といふのが適當であるから、主觀とは最狹義に解して作用側に於ける同一契機とするのが至當である。而して作用側全體は主觀領域としてそれらから區別すべきである。

フッセルも自我を以て或時は作用の總體と解^(二二)し、或時はノエシスに於ける各作用の同一契機と解し、又はノエシス、ノエマを含む具體的な體驗全體と解してゐる。而して同一契機としての自我を極(pôle)としての自我といひ、體驗としての自我をモナドとしての自我と呼んでゐる^(二三)。

(二) 内容と對象 リッケルトに於ては超越的意味が認識の對象であるが、それは經驗的主觀に對していふことであつて、先驗的主觀にとつては對象とはいへぬ。何故ならば屢々いふ如く超越的意味は先驗的主觀によつて構成されるものであるからである。勿論その構成は同時に對象の構成であるともいへよう。然しそれでは對象の本來の意味が解らぬ。即ち單に形式、内容の關係のみならず、作用、内容

の關係が考慮され、その内容に關して新しい對象概念が問題とならねばならぬ。

フッセルによれば、對象も亦純粹意識の内に成立する。即ちノエシス側に於て多數の作用の同一契機として自我が考へられる如く、ノエマ側に於ては多様のノエマの統一點としてノエマの核が考へられ、更にそれらの中心點が考へられる。

これが多様の内容に於ける同一的なるものとして對象といはるべきものである。⁽¹⁴⁾

意識は或ものの意識であるといふ時、その或ものとは、この意味での對象を指すのである。然し對象は決して意識の外にあるのではなく作用によつて志向されるノエマの統一點として志向される所のものであり、畢竟ノエマに外ならぬ。以上は對象成立を意識に於て横斷的に見た場合であるが、次に意識の流に於ける縱斷的な場合を考察せねばならぬ。意識は流であつて、ノエマも對象も總てその流の中に構成されるものである。然し凡ゆるノエマは一度構成されたる以上は、たとへ流の中に沈んでも、自立的存在を持続して、作用が再びそれに向ふ場合には、それが同一契機として作用に對立する。⁽¹⁵⁾ これが縱斷的に見た對象成立である。かくて對象といはれるものも結局ノエマ乃至内容に外ならぬものであるが、前の場

合には、統一點となるものを對象といひその他のものを内容として、後の場合には、既に成立せるものを對象といひ今次のものを内容として各區別するのである。

かくて對象は作用から獨立的のものの様に一般に思はれてゐるが、又確に作用に對して自立的ではあるが、決して作用といふものから又は體験乃至意識といふものからは獨立的ではないのである。かくて凡ゆる對象は意識の流に於て構成されるのである。^(二六)

さて作用側に於て主觀と作用とを區別し、多様の作用とその同一契機としての主觀とを含む全體を主觀領域と名づけた如く、内容側に於ても對象と内容とを區別し、多様なる内容とその同一契機とを含む全體を客觀領域といふことが出來よう。かくて意識領域は主觀領域と客觀領域とより成る、といふことが出来る。

尙右の如く意識の構造が明らかになると共に志向性の概念も亦、更に吟味する必要がある。

(三) 志向性と指向性 作用の、内容に對する關係を志向性といつたが、更に作用が内容を經て對象に向ふのも志向性である。又内容が對象に向ふのも一種の志

向性である。これは指向性(Orientierung)といふのが至當であらう。又作用が他の作用に向ふのは志向性であり、内容が他の内容に向ふのは指向性である。作用、内容、對象の關係は横斷的志向であり、作用から作用への志向、又は内容から内容への指向は夫々縱斷的志向又は指向といふことが出來よう。然しそれらは何れも意識の流の中に成立するものである。尙、意識の流といつても、決して経験的時間ではなくして現象學的時間に於ける流である。経験的、超越的時間は却つて現象學的時間の中に構成されるものである。

さて以上はリッケルトの形而前的領域とフッセルの純粹意識とを關聯せしめることによつて意識の構造を明らかにしたものであるが、兩者の見解には根本的な相違點が二つあるのである。即ちその一つは、リッケルトに於ける先驗的主觀は超個人的であるのに反し、フッセルの純粹意識は個人的である、といふ點である。他の一つは、リッケルトの形而前的領域は直接的ななるものののみの領域であるが、フッセルの純粹意識に於ては必ずしも直接的のものののみではなくして間接的のものももそこに於て構成されるのである。即ち後者に於ては間接的構成としての判

断もその中に成立するのであるが、前者からは排除されるといふ點である。而して前の點は意識の構造一般の問題に關係し、後の點は判斷意識の問題に關係する。故に先づ前の問題を考察して、意識の構造を確定せねばならぬ。

先驗的主觀 フッセルによれば本質把握は經驗的多様の中に於ける一種の抽象によるものである。而して本質とは一般に經驗的多様に對して普遍性と同一性とを有するものである。而して經驗的多様即ち事實は本質によつて成立するものである。是を以て見るに、經驗的個別的のものは認識根據からいへば、普遍的同一的のものとしての本質に先行するが、存在根據からいへば、その逆であつて、本質が事實に先行するのである。この事は意識に關しても同様である。即ち存在根據からいへば純粹意識に於て初めて經驗的意識が構成成立するものであるのに、認識根據からいへば經驗的意識より更に還元によつて初めて純粹意識に到達するのである。従つて個人的純粹意識によつて構成さる間主觀性(Intersubjektivität)といふものは、たゞへ認識根據から見て個人的純粹意識によつて構成されるものと見られるにしても、存在根據から見れば、その逆であつて、間主觀性に於

て個人的純粹意識が構成されるものと見るのが至當である。個人的純粹意識が經驗的意識よりも存在根據から見て先行することを認め乍ら、間主觀性を以て個人的純粹意識の單なる構成と見るのは方法原理の不徹底である。若しフッセルの説いた經驗的意識と個人的純粹意識との關係を押し進めれば、間主觀性は更にそれらに先行する事となり、若し間主觀性と個人的純粹意識との關係を押し進めれば個人的純粹意識も經驗的意識による單なる構成に過ぎぬものとならう。^ハ かくては先驗的觀念論としての純粹現象學の根本思想に相反することになる。從つてフッセルの本來の思想を押し進める限り、間主觀性こそ最後最高の根據とならねばならぬ。フッセル自身も一方、他我は勿論間主觀性も亦、個人的自我の中に構成される、と説くにも拘らず、他方、間主觀性こそ根源的存在であるといつてゐる。^(二七) かくてフッセルが現象學的時間に於ける個人的純粹意識の流の中に、超越的時間及び實在的なるものが構成されることを説いたのは存在根據からであり、個人的純粹意識より間主觀性への途を説いたのは認識根據からであるのである。従つて存在根據からの見方を徹底せしめるならば間主觀的意識の純粹な流の中に個

人的純粹意識も、更に経験的意識も構成されるものといはねばならぬ。尚フッセルは間主觀性の問題を主として客觀的世界の問題に關聯させ、個人的環境ではなく、各人に共通の唯一の客觀的世界の成立の立場として間主觀性を求めてゐる。^(二八)

而して間主觀性によつて成立する客觀的世界とは必ずしも實在的世界のみではなく、文化の世界、意味の世界等をも含むものではあるが、その説く所が主として實在界を意味してゐる様に思はれる。^(二九)これは二重の意味で誤である。即ち一方それは現象學的立場を侵害し、他方間主觀性の概念を無意味のものたらしめるものである。即ち一方實在的なものの成立の豫想として間主識性即ち各個人的主觀に共通なる主觀性が求められる、といふことは實在的なるものの同一性を豫想してゐることを意味する。然るに實在的なるものは現象學的に見れば超越的自然的見方に屬するもので現象學的見方に於ては排除さるべきものである。然るにかかる排除さるべきものをその領域内に取入れることは、その立場を自ら破壊するものである。又それは超越的なものの同一性を初めから豫想するものであるから、意識に於ける同一性より客觀側の同一性を求め様といふ現象學的見方に相反

するものである。即ち構成さるべきものを既にあるものとして豫想することは不當假定の誤を犯すものであり、實在的のものを直ちに持つてくることは自然的見方との混同であるといはねばならぬ。尤も、存するものを存するものとして、その根據を求めるのが先驗的であるといふかも知れぬ。然しそれでは begründen ではなくして fundieren せんとする現象學の意味を失ふことになるであらう。他方に於て、經驗的實在的なものには、經驗的意識が相對すべきものであるのに、それに現象學的間主觀性を相對せしめることは、間主觀性の意味を没却するものである。又フッセルによれば、客觀界は元來個人的純粹意識に於て原本的に(primordial)構成されるものであるから、單にその共通的のものとしての客觀的世界の豫想として間主觀性が考へられる、といふことは間主觀性も亦個人的純粹意識の一つの様相に外ならぬものとならう。然る時は間主觀性なるものを求める必要はなくなる。従つて、かくて求められた間主觀性は全く存在性の稀薄な、根據のない陰影に過ぎぬものとならう。尤も彼自身その様に考へてゐる様にも見えるがその誤であることは前述の通りである。確に間主觀的意識に於けるノエシスは最普遍的であ

るから、そのノエマも亦最普遍的であらう。然し普遍的といふことと、客観的實在といふことは決して同一のことでない。又總てのものは間主觀的意識の流に於て構成されるべきであるから、實在的のものもその中に於て構成さるべきであらう。さりとて實在的のものを直ちに間主觀性に對せしめるのはどうしても誤であつて、そこに於ける經驗的主觀の成立を示して後、それに相對するものとして實在的なものを説くのでなければならぬ。

右の如くして主觀概念は純粹普遍的ノエマに對する、純粹普遍的ノエシスとして解するか、又はそのノエシス、ノエマの兩者を含む純粹普遍的意識領域としての間主觀性と解するか、又はかかるノエシスの極としての間主觀性に歸着せしめねばならぬ。但し前述の如く主觀概念は嚴密にいへばノエシスの極と解すべきであつて、主觀領域及び意識領域と區別すべきである。かくてフッセルの個人的純粹意識の先驗的現象學は止揚されて、間主觀性即ち超個人的純粹意識の先驗的現象學にならねばならぬ。尙彼によれば純粹意識は個人的であるから、その時間も亦個人的でなければならぬ。従つて間主觀性の時間は各個人的時間に共通の時

間であるといはねばならぬ。然しこれは前述の如く却つて間主觀性の唯一の時間より各個人的時間が構成されるものと解さねばならぬ。かくて一切は間主觀性の純粹な時間の流の中に構成されて行くのである。フッセルが個人的純粹意識の流及びその時間について述べたことは、その普遍性に於て、同様に間主觀性について言ひ得るものである。

更に問題となるのは間主觀性即ち超個人的主觀と個人的經驗的主觀との中間に尙、先驗的個人的主觀が存し得るか、といふことである。さてフッセルによれば本質は事實に對して普遍的である。事實は本質の事例である。然るに個人的純粹意識に於ける本質論觀は個人的である故に、これも間主觀的還元を必要とするならば、本質に個人的本質と間主觀的本質とがあることとなり、前者は後者の事例となる、といはねばならぬ。かくて事實は個人的本質の事例となり、後者は更に間主觀的本質の事例となるとすれば、間主觀的本質に對しては個人的本質も事實も事例となると考へねばならぬ。本質が普遍的であるといふことは、個人差のないといふ意味をも含むである。元來個人差とは經驗的にのみ生じ得るものである。

従つて間主觀的本質から見れば個人的本質も亦經驗的要素を含むものといはねばならぬ。従つて純粹に本質といひ得るものは間主觀的本質のみであり、他の一切都是經驗的事實である。個人的本質といふのは、いまだ純粹にならざるものである。確に、本質は普遍的のもののみならず、特殊的のものもある。然しその際の普遍、特殊の關係と、個人差に對する普遍の關係とは存在仕方的に異なる。前者の特殊は、いかに特殊でも尙事實に對しては個人差を絶してゐるものである。従つて個人的本質といはれるものと特殊な本質とを混同してはならぬ。前者は個人差を含むものであるから純粹なる本質とはいへぬ。個人的本質といはれるものは結局特殊的な純粹なる本質に歸するか、又は經驗的事例に歸するか、何れかでなければならぬ。それと同様なことが個人的純粹意識についていへる。それは結局純粹性の故に間主觀性に歸着するか、又は個人的なる故に經驗的主觀に歸着するか、何れかであつて、到底中間者として止まり得ないものである。かくて純粹に先驗的主觀といひ得るものは獨り、間主觀性即ち超個人的主觀のみである。即ち主觀は先驗的超個人的主觀か又は經驗的個人的主觀かである。而して後者は寧ろ

前者の構成によつて成立するものであるから、先驗的立場に立つ限り、主觀とは前者のみを指すのが至當である。又嚴密に純粹意識といひ得るのは先驗的超個人的意識領域のことである。

四 意識領域と判断意識

以上によつて意識乃至意識領域の構造を明らかにしたのであるが、最後に判断意識そのものの構造について論ずる前に、先に述べた、リッケルトとフッセルとの第二の相違點について論及しなければならぬ。即ち意識領域は直接的なるもののみより成りて、間接的構成としての判断を排除するものか又はそれを含むものであるか、といふことである。

リッケルトは形而前的領域は直接的なものの領域であるといふが、前述の如くそれは形式的極小として同一性の形式を有するものである。即ちそれは内容に對する形式的構成である。而してかかる構成は判断であるから、原本的な領域にも既に判断が含まれる、といはねばならぬ。而してこの事は一方に於て、判断も

亦形而前的領域に於て成立するものである、といふことを示すものであると共に、他方に於てかかる錯雜は二つの内容概念の混同及び形式と作用乃至主觀との混同に基くものである。故にその各概念を區別して、リッケルトの説く所を解するならば、先づ最基底的段階としての形而前的領域に於ては直觀作用と直接所與内容との統一が存するが、次の段階に於ては、直觀作用を内容(質料)として高次的作用即ち形式としての作用がそれに加はつて作用側の構成が行はれ、それに應じて内容側に於ても直接所與を内容(質料)とし、作用側に於ける高次作用に對應する内容が形式的要素として構成が行はれるのである。ここに判斷が成立するのである。故にかく解すれば判斷は形而前的領域を脱するものである。然るに形而前的領域即ち意識領域の構造は作用、内容及びその兩者の關係としての志向性から成るものであるが、判斷も亦内容を志向する作用である。従つて判斷も亦それら要素の統一としての意識領域であるといはねばならぬ。かくて形而前的領域を直接的なものと解する限り判斷はそれに屬しないが、それを一般的構造を有する意識領域として解する限り判斷も亦それに屬するものである。然し直接的なるもの

は單に最初に限られ、後は構成のみであるといふのではない。その兩者は種々組合はされて展開するのである。この絶間なく展開する流こそ持續的意識領域である。而してかかる意味での意識領域の中に直觀も判斷も含まれるのである。

かくて判斷も亦意識領域に於て成立することが明らかになつたのであるが、然らば判斷意識はいかなる特質を有するものであらうか。

判斷とは主語に述語を述べることである。然るにフッセルの解釋によれば、知覺とは質料を土臺とする意味賦與作用であるから、知覺も亦質料を主語とする陳述作用と解される。又判斷の特徵といはれる綜合作用も知覺に存してゐる。^(三〇)何故ならば知覺は感覚と異なつて、多様を統一して一つの對象を構成する作用であるからである。然し陳述作用及び綜合作用が必ずしも總て判斷であるとは限らぬ。何故ならば疑問、假定等の作用は陳述作用であつても判斷とはいへぬ。又聯想は綜合作用であつても判斷とはいへぬからである。判斷の特質は主語に述語を陳べると同時に、その眞又は偽についての主張をなすことである。この主張機能こそ他の作用と區別さるべき特質である。従つて知覺といはれるものであつ

ても主張契機を含むものは判断といはねばならぬ。即ちそれは知覺判断である。然らば知覺に主張の伴ふものと伴はぬものとあるであらうか。フッセルによれば知覺も判断と同様に信の性格を有すべきことを説いてゐる。^(三二) それにも拘らず兩者が區別されるのは、いかなる理由によるか。前述の如く非感性的知覺に原本的に能與されるものは名辭的のものと命題的のものとあるが、フッセルによれば命題的のものは通例判断 (das Urteil) といはれるからといって、それが與へられる場合の作用を判断作用といふのは正しくない。又名辭的のものは概念といはれるからといって、それが與へられる場合の作用を表象といふのも正しくない。その實質が命題的のものであつても、名辭的のものであつても、各々それを單純に表象する場合と、その存在價值に對して何等かの態度決定を伴ふ場合とによつて異なる。前者は非指定的表象といはれ後者は指定的表象といはれる。而して元來判断とは後者のことであつて、判断と區別される意味での表象とは前者のことである。^(三三) 而してかかる表象とは彼のいふ質料としての表象(感覺)ではなくして、作用としての表象即ち非感性的知覺と解される。故に判断と知覺とは、その實質の形

態の差によるのではなくして、措定的か非措定的か、即ち主張機能の存するか否かによつて區別されるのである。従つて先に、知覺には信といふ性格が伴ふといつたのは、主張機能の伴ふ場合即ち措定的の場合であつて、嚴密にいへば單なる知覺ではなくして、知覺判斷といふべき場合である。従つて知覺が一方判斷と同視され、他方判斷と區別されるのは右の如く知覺が二様に解されるからである。即ち同視される場合は主張的構成的な作用としての知覺即ち知覺判斷であり、區別される場合は無主張的無構成的な作用としての知覺即ち單なる表象としての知覺である。而して本來知覺といふ場合には後者の意味に解すべきである。かくて把握作用は、その把握される實質の形態を問はず、把握の仕方から區別されるならば表象か判斷か何れかである。而してその際、表象とは知覺のことと意味するが、知覺の要素としての基底的單純なるものは感覚であるから、細別するならば感覚と知覺とが表象といはれるものである。

かくて判斷意識のノエシス側に於ける特徵は主張契機であるといふことが出来る。然るに主張は確信に基くものであるから、判斷は確信的主張作用即ち原信

憑(Urdoxa)である。^(三)而して主張作用とは存在定立作用であるから、そのノエマは存在性格を有する。これが判断意識のノエマの特徴である。而して作用側の様相に應じて存在性格の様相が定立されるのであるが、かかる存在志向といふことが判断意識に於ける志向性の特徴である。即ち同じ名辭的のもの「S」に關しても表象「S」と判断「S」とは異なる。前者は單純に「S」であるが、後者は「Sアリ」としての存在定立をなすのである。陳述とは必ずしも「SハPナリ」のみではなく「Sアリ」も亦立派な陳述であり構成である。かくして判断作用は必ず構成的であるが、それに應じて、ノエマ側も構成的である。判断の對象は事態である、といふのはこの理由に基くものである。

判断の眞偽は對象との一致、不一致によるのであるが、それは意味賦與作用、嚴密にいへば意味指示作用と意味充實作用との一致、不一致によるのである。フッセルによれば充實作用を伴はぬ單なる意味指示作用は、廣義の判断とはいひ得るが、本來の判断とはいひ得ないのであつて、それは意味充實作用を伴ふべきものである、といつてゐる。^(三四)然し意味指示作用と充實作用との區別の存するのは、判断に

特有なものであつて、知覺には存しないのである。知覺に於ては、それが同時に行はれるといふが、たゞ同時にせよそれが區別される以上は既に知覺判斷であつて、原本的能與作用としての知覺にはその區別はないものといはねばならぬ。

右の如くして意識領域の構造及びそれに於ける判斷意識の特徴について一應明らかにしたのであるが、最後にはしがきに於て述べた如く、ウイルムゼンの説を一瞥して、彼がフッセル及びリッケルト等に關して説く所を吟味し、而して判斷意識の何ものであるかについて一層明らかにしたいと思ふ。

ウイルムゼンは判斷作用と思想としての判斷と、判斷作用や判斷思想が意向する(meinen)志向的事態(der intentionale Sachverhalt)と、更にそれらによつて志向された事態(der intendierte Sachverhalt)とを區別し、^(志向)志向的事態とは判斷思想の成立と共に、その通りに成立し、志向される事態であるが、志向された事態とは、かかる意向に全く獨立的に存し、その判斷思想の眞偽の標準となるもので、全く超越的な對象であるとしてゐる。而して思想の中には單に判斷乃至判斷思想のみではなく、疑問思想、假定思想等も含まれるが、特に判斷として、その他のものから區別される所以は、

それに主張契機(Behauptungsmoment)が含まれてゐるからである。^(三九)この點はフッセルや、ブランダーと同様である。更にウ・イルムゼンによれば主張契機とは主觀の主張作用を豫想せずしては考へられぬものであるから、判斷思想は主觀の作用によつて構成され、而もそれに内在するものといはねばならぬ。而して彼によれば主觀とは心理的作用の主體としての主觀に外ならないのであるが、それにも拘らずそれによつて構成される思想は決して實在的(real)であるを要しない。^(三九)かくして思想は一方右の如く内在性を有するが、他方主觀から全く獨立なる性質を有してゐる。即ち彼によれば判斷思想の特質は三つに大別される。その第一は das generelle Sosein であつて、それは思想の無時間性であり、その第二は das spezielle Sosein であつて、それは更に廣義と狹義とに分たれ、前者は眞理又は偽としての性質であるが、彼によれば、思想の眞又は偽といふ性質と、眞なる思想又は偽なる思想とは區別しなければならぬ。前者はその思想と超越的對象との一致又は不一致によつて定まるものであつて、思想そのものだけでは何等それに關與し得ない性質である。従つてそれは嚴密にいへば、思想の特徵といへぬものである。それに反して

眞なる思想又は偽なる思想といふものは、主張契機を以て構成された判断であつて、判断思想は必ず主張契機を含み、それを含む限り必ず眞なる判断か偽なる判断か何れかであり得るものである。故にそれは判断思想そのものの眞又は偽といふ性質ではなくして判断思想の眞又は偽となり得る性質を意味してゐる。この性質は必ず判断そのものの有するものである。これが狹義の方であり、本来判断の第一の特徴といひ得るものである。第三は das singuläre Sosein であつて、それは判断の實質(Gehalt)である。例へば「三角形ハ直線圖形ナリ」といふ判断は「三角形ハ三邊ヲ有ス」といふ判断とは異なる内容(Inhalt)を有する。この様に各判断思想は各異なる内容を有するものである。更に思想は事態を思向するといふ性質がある。即ち思想の内容は必ず、その内容に相應する志向的事態を思向し、更にそれを通じて志向された對象を思向する。かかる、内容とその思向性とを判断の實質と名づけてゐる。かくて判断思想の三つの性質の中、第二のみは主觀に依存する性質であるが、第一、第二は主觀から全く獨立である。尙第一の性質は詳細に考察すれば思想の統一性、同一性、超時間性、超個人性を總稱するものである。^(三九)

かかる立場から (一) フッセルの対象について批判してゐる。(イ) 卽ちフッセルによれば対象は志向的対象以外の何ものでもない。フッセルは意味と対象とを區別してゐるが、結局何れも作用によつて志向されるノエマ及びノエマの統一點に外ならぬものであつて、超越的要素を有しない。かかる志向的対象であるにも拘らず、それを意味と區別してゐるのは不合理である。^(四〇) (ロ) 又判断思想の志向的対象は其の判断思想の内容通りのものでなければならぬから「ナポレオンはイエナの勝利者なり」と「ナポレオンはワーテルローの敗北者なり」といふ二つの判断思想は決して同一の対象を志向してゐない。^(四一) それらの内容は各異なつた内容であると共に、各異なつた対象を志向してゐる。更に判断の対象とは詳細にいへば主語対象と述語対象との關聯としての事態であるから、それらの対象は更に「ナポレオン」といふ対象とも異なるのである。後者は前二者とは全く異なつた思想の対象である。かくてフッセルは志向的対象と志向された対象とを混同し、而してその混同によつて対象を全く内在化したのであるとして彼を難じてゐる。先づ後の批判^(ロ)から考察して行かう。確にフッセルは「論理學研究」及び「理念」に

於て對象を説く場合には、ヴィルムゼンのいふ如く説いてゐる所もある。然しそれは主に實在的對象に關して述べてゐる點であつて、ヴィルムゼンはその點のみを見てフッセルが理想的對象に關して説く所を見ないのである。理想的なものには名辭的のものと命題的のものとある。而して更に兩者とも單純なものと複雜なものとを有する。然しそれらは何れも一つの全體として與へられることが出来るし、又それらがその形態のまゝ理想的對象となることが出来る。又單純のものから複雜なものが構成されるにしても、その複雜のものが、そのまゝ對象となり得る。勿論理想的對象の場合にもノエマとその統一點との區別はあり得るが、後者は必ずしも單純のものとも、名辭的のものとも限られる必要はないのである。

従つてウイルムゼンがフッセルの解する對象を以て名辭的のものののみの如く説くのは誤である。かゝる理想的對象についてはフッセルの「內的時間意識の講義」、「論理學」、「デカルトの冥想錄」に主として述べられてゐる。かくてフッセルのいふ對象を名辭的のもののみと解するのは誤であるが、同時に、嚴密にいへば、フッセルが判斷の對象として名辭的のものをも認めてゐるのは誤であると思ふ。判斷の對

象は確にウイルムゼンのいふ如く事態でなければならぬ。何故ならば判断とは、屢々述べた如く主張作用であるが、フッセル自身もいふ如く主張は存在主張であり、それには存在論的意味があるものである。^(註1) 即ちたとへ「SハPナリ」ではなくても「Sアリ」が既に事態を示すものと解さねばならぬからである。判断の対象としての事態といふことは既に「理念」に於ても説かれてゐる。^(註2) リッケルトもいふ如く「SハPナリ」は「Sハ存ス」を豫想するものであり、「SハPナリ」は「S」についての二重の賓辭陳述を意味するものである。^(註3) かくて判断はたとへ名辭的のものを対象とする如く見えても、判断に關する限りその対象はその主語的のものの何等かの態様を意味するものと解さねばならぬからである。ウイルムゼンはそれを対象の *Selbst-verhalten* と稱してゐる。

次に最初の批判(イ)について考察しよう。フッセルは、ウイルムゼンの批判する如く確に、対象も意味と同様に純粹意識に内在するものと説いてゐる。然し全く内在的のもののみを説いて、超越的のものを説かないかといふと決してさうではない。超越的対象をも説いてゐる。然しそれも尙本來純粹意識と無關係ではな

くして、本來純粹意識に内在するものである。即ち純粹意識に於て作用がノエマを構成する際、そのノエマはそのノエシスと共に顯現的に存してゐるが、注意がそれに向けられぬ場合にはその兩者とも潛在的の領域に入る。その際それは確に意識に内在してはゐるが、後にそれを再び想起する場合にはそれが現在に對して超越的と考へられる。即ち過去は現在に獨立的である。然し全く獨立的といふのではない。現在は過去及び將來を擔ふ所の現在である。従つて過去も現在に含まれてゐる。眞に存するものは現在のみである。従つて現在は顯現的であるが、過去も將來も潛在的である。但し將來はこれより存すべきものとして潛在的であり、過去は既にあつたが今はなく而も想起され得るものとして潛在的である。フッセルが知覺判斷と區別した意味判斷 (Signifikation) とは、現在の意味賦與作用であると共に將來その充實さるべき事を豫想するものであるが、その充實は過去に於て成立せる對象との一致である。過去は現在及び將來によつて改變され得る。然し改變され得るには、その土臺としての改變され得るものがなければならぬ。かかる改變され得るものとしての過去の存在そのものは現在としては如何

ともなし得ぬものである。この意味で過去は必然的である。それに對し現在は現實的であり、將來は可能的(possible)である。かかる意味で過去は超越的と考へられる。勿論超越的とは過去のみではない。現在に於ても、超越的なるものを構成することが出来る。即ち超越化(transzendentieren)がそれである。然し嚴密にいへば、過去なしには超越的なるものは考へられるものでない。即ち意識は常に過去志向(Retention)と未來志向(Protention)との連續である。過去志向は既に過去の成立を豫想してゐるものであるが、かかる過去志向をも記憶によつて顯現的に持續せしめることが出来る。^(E.H.) 然る時その持續の全體をも現在と呼ぶことが出来る。

而してこの現在に於て超越的對象を構成すること即ち嚴密にいへば構成内容を超越化せしめることが出来る。これが現在に於ける超越化と考へられるものである。然しこの現在は絶えざる流の尖端としての尖銳的現在(das feine Jetzt)ではなくして粗雑な現在(das grobe Jetzt)である。^(E.K.) 而して嚴密にいへば後者は過去を含むのである。即ち内容の超越化とは一種の陳述であり、陳述には主語を要し、主語と述語陳述との間には時間の経過を必要とする。かくて嚴密にいへば超越的な

るもののが成立には常に過去が含まれてゐなければならぬ。それに反し現在は常に内在的である。かくしてフッセルは内在的のもののみならず超越的のものをも説くのであるが、それは飽くまで意識の流の内に於てのことである。而して、兩者とも元來内在的のものであるからこそ、意味賦與と意味充實との關係からして眞又は偽を決定し得るのである。而して前者のノエマが、謂はゞ内在的乃至志向的對象であり、それと一致又は不一致となるべき事態が超越的乃至志向された對象であるといふことが出來よう。而して後者は、たとへ現在を超越してゐても、意識に内在的なる故、想起によつて現在化(vergegenwärtigen)することが出来る。ここにこそ、兩者の一致、不一致即ち眞偽の決定をなし得る根據があるのである。ヴィルムゼンのいふ如く志向的對象と志向された對象とは確に區別さるべきであらうが、若し彼のいふ如く後者を主觀から全く獨立的のものとするならば、それとの一致、不一致といふことが、いかにして知り得るであらうか。否、それの存するといふことすら、いかにして知り得るであらうか。この點に於てヴィルムゼンは誤つてゐるといはねばならぬ。尙ウイルムゼンの志向的事態と志向された事態とい

ふ用語に對して、リッケルトの内在的意味と超越的意味との用語を新しい解釋の下に用ふる事が出來るであらう。

(二) 更にウイルムゼンはカント及びカント派一般に批判を加へ、その説く所を論理的超越主義 (Logischer Transzentalismus) と名づけ、その誤である事を指摘してゐる。(イ) 卽ちカントは判断の先天性即ち経験からの独立性を説いてゐるが、それは結局普遍性と必然性とに歸着する。而してその事を意識一般の構成といふことによつて基礎づけ様としてゐる。リッケルトも亦同様である。(ロ) 更にリッケルトについては、眞偽の問題について次の如く批判してゐる。即ちリッケルトは先驗的意識と經驗的意識とを區別し、前者は問はれずして肯定又は否定するものであるが、後者は間に對する答としての肯定又は否定であつて、前者は後者に對し、各、眞理自體又は偽自體となるとしてゐる。然るにウイルムゼンに従へば、判断思想には眞なるものも偽なるものもあると共に、肯定的なるものも否定的なるものもある。故に肯定的なるものが眞とは限らず又否定的なるものが偽とも限らない。故にリッケルトは、眞理自體は肯定的判断意識一般により、偽自體は否

定的判断意識一般により構成されるといふが、その點不徹底である。又リッケルトによれば経験的主觀は誤り得る主觀であるから、少くとも偽自體を構成する否定的判断意識一般は経験的のものとならねばならぬであらう。従つてリッケルトは真理自體と偽自體とを同列に説いてゐるが、結局後者は経験的意識に屬するものとなるから、自體的のものは真理のみとならう。然るにウイルムゼンによれば右の様に、真理の獨立をカントの如く意識一般に基かしめることとリッケルトの如く主觀から獨立である理由を真理といふことに基かしめる事とは何れも誤れる論理的超越主義の思想であるとしてゐる。彼によれば判断思想は一般に主觀から獨立であり、それには眞も偽も、肯定も否定もあるのであつて、真理又は肯定態のみを主觀から獨立とするのは誤である。リッケルトは真理自體、偽自體についてでは肯定的又は否定的判断意識一般を説き、又肯定、否定については價値、非價値を説いてゐるが、何れも消極的方面については不明瞭であると批判してゐる。^(四七) 尚彼によれば、リッケルトの如く真理を以て超越的とする思想は、ライブニッツの思想を受継いだバウフに於ても、更にボルツァーノに於てもあるが、リッケルト等が

對象をも主觀の構成に歸したのに對し、ボルツァーノが眞偽の決定は主觀から全く獨立な對象との一致不一致によるとしたのは正しいとしてゐる。

確に判斷思想に眞偽、肯定否定の各側面の存することは、ウイルムゼンの言ふ如くであり、ブフェンダーもいふ如く思想には單に判斷のみならず更に疑問、假定、希望等も含まれるであらう。^(四八) 然しそれらの主觀からの獨立といふことについては前に超越性について述べた通りである。而してウイルムゼンの説く如くリッケルトの眞偽、肯否、價値非價値の説が不徹底であるか否かの問題には今は觸れずにおく。ここに重要なのは主觀についての見解である。ウイルムゼンはリッケルトを批判する際に経験的意識と先驗的意識との區別を認め乍ら、カントを批判する際に、カントの意識一般を以て心理的作用と解し、更にそれと共にリッケルトの意識一般も亦カントのそれと同様であると解してゐる。^(四九) 卽ち彼は主觀は作用であり作用は心理的であるといふ前提の下に論じてゐるのである。然しそれは却つて既に構成された自然的立場に立つものであつて、フッセルのよく批判した所である。純粹なる現象學的自我こそ眞に純粹なる作用としての主觀と解すべき

である。確にウイルムゼンの如く経験的主觀に立てば對象も全く超越的といふ事も出來よう。がそれは一面的見方に過ぎない。又たとへ経験的意識に立つにしても、それは先驗的意識に於て構成された立場であり、對象も亦先驗的意識に於て構成されたものであるから、その根底に於ける先驗的意識を通じて、對象とも亦關係してゐなければならぬ。更にかかるものと解された経験的意識は先驗的意識に於てのみあり得るものである。カントやリッケルトの意識一般は、かかる先驗的純粹意識と解されねばならぬことは前述により明らかである。

五 結語

さて以上を要約すれば次の如くである。判斷意識とは超個人的純粹意識の中に構成されるものである。而して意識の構造は、一方その主觀側に於ては多様なる作用に對して同一契機として主觀即ち超個人的先驗的主觀が存し、他方客觀側に於ては多様なる内容乃至意味に對して同一契機としての對象が存するものである。而して作用の構成は同時に内容の構成と相應するのであるが、作用は必ず

内容に向ふものであり、又作用に對應せぬ内容は存しない。かかる作用、内容の關係を志向性といふ。而して作用も内容も意識に於て存し、時間の中に流れるものである。即ち純粹意識の流に於て志向的作用が内容を構成するのである。而してかかる意識が特に判断意識といはれる場合は、作用側に於ては主張契機の存する場合である。即ちそれによつて疑問、假定、希望及び恐怖等と區別される。而して内容側に於ては作用側の主張契機に應じて存在性格の契機を有するものである。而して主張契機に様相のある如く、存在性格にも様相がある。然しノエシス側の信憑様相に應じて夫々の存在性格がノエマ側に於て定立されるわけであるが、信憑性格を有する作用の總てが判断であるとはいへぬ。判断はその中、原信憑を有するものである。即ちそれは原本的、存立定立の性格を有するものである。それ故判断に關する限り、その定立する存在性格は、時間の三様相即ち現在、過去、未來に應じて、夫々現實性、必然性、可能性の三つを基本的のものと解することが出來ると思ふ。更に判断に於ては判断作用及び判断内容は、判断對象即ち事態によつて、その眞又は偽が決定される。而してかかる決定をなし得る所以は、超越的とい

はれる對象も亦意識の流に於て創造され構成され、而もその中にあるものであるからである。而してかかる判斷意識は純粹意識に於けるものであり、従つてその對象も純粹なものである。實在的なるものとは、かかる純粹意識の中に於て構成される經驗的意識に對して初めて存するものである。純粹意識が純粹時間に於てあるとすれば、經驗的意識及び實在的なるものは經驗的時間に於てあるものである。經驗的時間は純粹時間に於ける反省によつて構成されるものである。

さて、以上の所説に於て、フッセルと異なる點は純粹意識を超個人的に解し、それを基本的なるものとした點であり、リッケルトと異なる點は間接的構成的なる判断をも意識の流の中に入れた點である。

右の如くして純粹意識とはいかなるものかについて、而してそこに於ける判斷意識の位地、構造並に判斷意識そのものと不可分の關係にある主觀對象及び眞偽の概念について一應明らかにすることが出來たと思ふのである。然し以上は判斷意識の問題の唯粗略な瞥見に過ぎぬものであつて、更に廣く且つ深く考察るべき幾多の問題があると思ふ。^(五〇)

四

(1) A. Wilmsen : Zur Kritik des logischen Transzentalismus, 1935.

(II) Husserl : Logische Untersuchungen, Bd. II, 1. 1922, S. 456-8, 462-9, Bd. II, 2. S. 94. (訳 L. U. と略す。)

" : Ideen zu einer reinen Phänomenologie und phänomenologischen Philosophie, 1. 1922,

S. 172. (訳 Ideen と略す。)

(III) " : Ideen, S. 182.

(IV) " : Ideen, S. 201-2.

(V) " : L. U. Bd. II, 1. S. 369, 382-3, 392.

(VI) " : Ideen, S. 172-3.

(VII) " : Ideen, S. 181.

(VIII) " : Ideen, S. 172, 202-3.

(IX) " : L. U. Bd. II, 1. S. 457.

(X) " : Ideen, S. 282-3.

(XI) " : Méditations Cartésiennes, 1931, p. 36. (訳 M. C. と略す。)

(XII) " : The Encyclopaedia Britannica, 1929, p. 699-702.

" : Nachwort zu meiner reinen Phänomenologie und phänomenologischen Philosophie, 1930.

- (111) " : Formale und transzendentale Logik, 1929, S. 160. (參看 Logik 之論述。) M. C. p. 64, 65.
- (112) " : Logik, S. 40; L. U. Bd. II, 2. S. 143.
- (113) " : Ideen, S. 172-3.
- (114) " : M. C. p. 72.
- (115) " : M. C. p. 73; Logik, S. 228; The Encyclopaedia Britannica, p. 701-2.
- (116) " : M. C. p. 46.
- (117) Rickert : Vom Anfang der Philosophie, (Logos Bd. XIV) 1925, S. 139-142.
- (118) Husserl : Logik, S. 216; M. C. p. 36.
- (119) " : L. U. Bd. II, 1. S. 358.
- (120) " : M. C. p. 57; Logik, S. 204-5.
- (121) " : M. C. p. 57.
- (122) " : Ideen, S. 189, 267-9, 270-3.
- (123) " : Vorlesungen zur Phänomenologie des inneren Zeitbewusstseins, 1928, S. 82-3. (參看 Zeitbewusstsein, 之論述。)
- (124) " : M. C. p. 64, 71.
- (125) " : M. C. p. 133.
- (126) " : M. C. p. 109-111; Logik, S. 212-3, 105.
- (127) " : M. C. p. 71, 102; Logik, S. 105; The Encyclopaedia Britannica p. 701-2.

- (MÖ) " : M. C. p. 36.
- (ML) " : L. U. Bd. II, I. S. 442; Logik, S. 174.
- (MLI) " : L. U. Bd. II, I. S. 481, 485.
- (MLII) " : Ideen, S. 215-6.
- (MLK) " : L. U. Bd. II, 2. S. 193; Logik, S. 503, S. 196.
- (W) Wilmsen : Zur Kritik des logischen Transzentaliumus, 1935, S. 73-4. (以下Z. K. d. l. T. と略す。)

- (PK) " : Z. K. d. l. T., S. 83.
- (P) Pfänder : Logik, 1929, S. 180-3.
- (WK) Wilmsen : Z. K. d. l. T., S. 87-90.
- (WR) " : Z. K. d. l. T., S. 78-82, 108-113.
- (KO) " : a. a. O., S. 85-8.
- (H1) " : a. a. O., S. 98.
- (HII) Husserl : Logik, S. 121.
- (HK) " : Ideen, S. 15.
- (RK) Rickert : Die Logik des Prädikats, 1930, S. 121.
- (HK) Husserl : Zeitbewusstsein, S. 71; M. C. p. 38.
- (EK) " : Zeitbewusstsein, S. 33, 55-6.

和 略 條 十 六

**

(エフ) Wilmsen : Z. K. d. I. T., S. 57-62.

(エク) Pfänder : Logik, S. 149.

(エル) Wilmsen : Z. K. d. I. T., S. 177, 235, 249.

(エオ) ホルツの『論理学』の著者 G. Pick: Die Übergegenständlichkeit der Werte, 1921; N. Bagdasar: Der Begriff des theoretischen Wertes bei Rickert, 1927. リッケルトの論理学の著者たるホルツの論及は私藏にある。ナウト。